

## 幼保小の架け橋プログラムの全市実施へ ～幼児期の遊びの中の学びを小学校の学びにつなげるために～

講師 佐川 早季子 京都教育大学准教授

### 1. はじめに

「幼保小の架け橋プログラムの全市実施へ～幼児期の遊びの中の学びを小学校の学びにつなげるために～」と題してお話します。

昨年まで3年間、京都市の幼保小架け橋プログラム調査研究事業において竹田小学校ブロックの架け橋プログラムの取組に関わってきました。

幼小接続といったときに、小は小学校を意味しますが、幼は幼児教育を指していると思ってください。幼児教育施設は、幼稚園、保育園、認定こども園を含んでいます。

私は、大学の幼児教育科におりますので、竹田小学校ブロックに関わって、小学校教育、幼保小接続等初めて学ぶことが多くありました。幼保小接続について教科書通りのことしか分かっていなかったところから、先生たちと一緒に取り組んできたからこそ見えてきたものもあります。

本日は、市内の幼稚園、保育園、認定こども園、小学校の先生方が集まっていたという貴重な機会ですので、良い学びの機会になったら良いと思います。小学校の先生方には、幼児教育のことを知っていただき、幼児教育に携わる先生方にも改めて、自分たちが実践していることの意味を確かめる機会にさせていただけたらと思います。

【1年生が4人で机を合わせて話している写真の提示】

これは1年生の教室の風景です。これがいつの風景かわかりますか？

入学直後の写真です。驚かれた先生もいるのではないのでしょうか。

私自身、フェーズでいえば、1の段階から、半

歩ずつ歩んできた過程を竹田小学校ブロックで伴走させてもらいました。1年生ではありえないと小学校の先生が思っていた「当たり前」の意識が、少しずつ変わっていくのを見てきました。

本日はその模索の中で見えてきたものを、なぜ今、幼保小接続なのか、幼保小接続をするとどんないいことがあるのか、幼児期の遊びの中の学びを小学校の学びにつなぐとはどういうことか、まず何をすればいいのかというところに着目していきたいと思います。

本日の流れ

1. なぜ、今、幼保小接続なのか？
2. 幼保小接続をすると、どんないいことがあるのか？
3. 幼児期の遊びの中の学びを小学校の学びにつなぐとは？
4. まず何をすればよいのか？

### 2. なぜ、今、幼保小接続なのか？

みなさんの学校・園の目標は何でしょうか？どのような子どもに育てていってほしいと思われませんか。

- ・遊び込める＝夢中になって遊ぶ
- ・自分の思いを表現する
- ・ワクワクして学ぶ
- ・生き生きしている
- ・主体的に取り組む

といった、主体的な子どもの姿を思い浮かべるのではないのでしょうか。

(1) 小学校入学期の子どものどんな課題があるか？

ではここで、小学校入学期の子どもにどんな課題があるか？を考えるために（ベネッセ教育総研次世代育成研究室 2012 年）の研究データを見ていただきたいと思います。

ベネッセ教育総研次世代育成研究室では、2012 年 1 月に年少児（3 歳児）から小学 1 年生の母親を対象に、「幼児期から小学 1 年生の家庭教育調査」を実施しました。その中に、次のような興味深いデータがあります。子どもが「人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができるかどうか」の項目を月齢別に見ると、年長児から小学 1 年生になるときに「とてもあてはまる」の割合が、大きく下がっていたのです。年長児までは少しデコボコがありながらも、ほぼ月齢にしたがって順調に伸びているのに、小学 1 年生で最も月齢の低い 6 歳 10 か月（2006 年 3 月生まれ）にはっきり落ち込んでいます。6 歳 9 か月と 6 歳 10 か月ではわずか 1 か月の違いしかないにもかかわらず、ここで大きく落ち込んでいるのがわかります。

人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる力は、「学びに向かう力」（非認知能力）の大事な要素の一つで、社会生活全般の経験に影響されて伸びていく力です。特に、言葉の発達に大きく依存するものです。今回の調査データを見ると、小学 1 年生でもっとも月齢の低かった 6 歳 10 か月（2006 年 3 月生まれ）に、はっきり落ち込んでいるのは、小学校の環境にスムーズに適応できていないからではないかと考えられます。

その原因は、幼稚園や保育園（所）でのコミュニケーションと小学校でのコミュニケーションのやり方に差があるため、自分の気持ちを伝えたり相手の意見を聞いたりするのが難しいと感じるためかもしれません。また、幼児期に比べて小学 1 年生での月齢ごとの伸びが小さいのは、教師が介入したコミュニケーションがうまくいっていない可能性があると言えるでしょう。

このデータでは、小学 1 年生の中でも月齢差があり、6 歳 10 か月から 7 歳 2 か月までの子ども（3 月生まれ～11 月生まれの子ども）が深刻な問題を

抱えています。しかし、小学校の先生はそれに気づいていない可能性が高いと思います。この段階ですでに差がついてしまっているのですから、高学年になると学力差がさらに広がることは当然でしょう。

（注 1）「学びに向かう力」とは、自分の気持ちを言う、相手の意見を聞く、物事に挑戦するなど、自己主張・自己統制・協調性・好奇心に関係する力のことを指します。（「幼児期から小学 1 年生の家庭教育調査」速報版 p 2 より）

小学校の先生は、「小 1 プロブレム」など小学校に適応できない子どもへの問題意識はかなり高い、にもかかわらず、なぜこのような問題が起きるのでしょうか？

小学校に入学した 1 年生に求められることでいちばん難しいのは、45 分という授業の枠組みだと考えられています。小学校導入期向けのカリキュラムをしっかりと実施している学校では、授業時間を 15 分、20 分単位に分割したり、合科的な指導をしたりするなど、幼児教育のやり方を取り入れながら、子どもたちの小学校の学び方への抵抗感を取り除いています。しかしそれを実施しているのはまだ一部の学校です。

小学 1 年生では、小学校独特の学習習慣や授業に向かう姿勢、たとえば、「先生の質問には挙手して、指名されたら、『はい』と返事をしてから答える」といった授業でのスキルや習慣を教えています。

しかし、とりわけ月齢の低い子どものなかには、それについていけず、発言しなくなる子どもも出てきます。ですから、先ほどお伝えしたような落ち込みも出てくると思われるのです。せめて 1 年生の一学期は、幼児教育のやり方を踏まえて柔軟に対応しつつ、徐々に小学校のやり方に移行する必要があるでしょう。

幼保小接続には、幼児教育施設側と学校とでは関心に差があり、小学校はこれまで通りで何も問題もないと思っている場合も多いようですが、先ほどのデータ等から見ると、現状維持では子どもが不利益を被ってしまうのではないのでしょうか。

これらの解決の糸口は幼保小接続です。「幼保小連携」とは、幼児教育施設と小学校の教職員間

の協働的な関係の事を言い、「幼保小接続」とは、幼児教育施設と小学校間の保育・教育内容やカリキュラムのつながりの事を指しています。幼保小接続の取組が推進されることによって、子どもが先生を好きになる➡学校を好きになる➡学ぶことが楽しみで面白くなる➡登校しづりがなくなる➡先生も子どもも主体的になるといった効果が生まれてきます。

## (2) 小1プロブレムと架け橋プログラム

2010年代の小1プロブレムの捉え方（H21(2009)年の東京都教育委員会の実態調査から）は、児童の不適応状況の要因（校長及び教諭の回答）として「児童に耐性が身に付いていなかったこと」「児童に基本的な生活習慣が身に付いていなかったこと」「家庭の教育力が低下していること」「児童の集団生活の経験不足」等の割合が高く挙がっていました。児童の不適応状況の発生の予防に効果的と思われる対応策（校長及び教諭の回答）としては、幼児に基本的な生活習慣や耐性を身に付けさせる取組を、家庭教育においてはもちろんのこと、保育所や幼稚園においても家庭との連携を図りながらより一層充実していくことが挙げられました。この頃の小1プロブレムの対応策としては、幼児期から学習規律を身につけ、小学校の前倒しのような小学校のための準備を子どもにしてほしいという対策を取ってきました。

この対策もある一定の効果はありましたが、新たな課題が出てきています。通級教室を利用する子どもの増加、不登校児童の急増につながってきています。コロナ禍を経て、特に1年生の、不登校率がすごく増えています。規律を守って集団で教えていくというやり方ではなく、一人一人に合った個別最適な教育が重要とますます言われてきています。そうしたところで、幼保小の架け橋プログラムの推進、充実の機運が高まっています。

## (3) これからの幼保小接続

これからの幼保小接続は、幼児期の育ちをベースにそれに積み重なる形で小学校の学びを積み上げていくというイメージになります。

これまでは、例えば、名前を書けるように、お箸が持てるように、じっと座っていられるように

と幼児教育施設が小学校の要望を取り入れることが中心だったところから、これからは小学校側が幼児の育ちを受け止めて、発展させるという発想の転換が重要です。幼児期に培われる学び・育ちは、小学校以降の主体的・対話的で深い学びの土台であるという考え方に変わってきています。OECD といった世界機構でも、「子どもが小学校のために準備をする」から「学校が子どもを迎える準備をする」への発想の転換が必要と変化してきています。

ここまで、なぜ、今、幼保小接続なのかについてお話しました。

## 3. 幼保小接続をするとどんないいことがあるのか？

初めに4人の1年生が机を合わせて話をしている写真を見ていただきました。皆さんの中で、この写真が入学直後の姿とは信じられないと思っている方もいるかもしれません。

以下に提示した「こんな先生いないかな？」は知り合いの先生からいただいたものです。

### こんな先生いないかな？

- ①職員室で「1年生は宇宙人！」などと言ってしまう。
- ②学校探検は、本当の「探検」ではない。
- ③入学当初は「～の仕方・使い方」のオンパレード。
- ④連絡帳に返事ができない。トイレに行く暇もない。
- ⑤子どもたちを上手に動かすための合言葉を多用する。
- ⑥席を立たせたくない。机は動かしたくない。
- ⑦目的や意図が不明確なきまりを守らせ続ける。
- ⑧机に貼った名前シールがベロンベロンになる。
- ⑨学校は、我慢するところ。園とは違う。
- ⑩学校が嫌いな子は、気合いが足りないと思う。

松村英治(2023)台東区教育委員会指導課資料より 15

このように感じる先生がいたら、自身の子どもの観や1年生観を見直してみてもはどうでしょうか。幼保小接続に取り組む中で、1年生観や子ども観、学習観が変わっていくのではないかと思います。

京都市の伏見住吉小学校と伏見住吉幼稚園で幼小接続の取組を平成26、27年度にされており、学校・園全体で取り組まれていました。その取組の中で、今後、取り組んでいくこととして、以下のようなことが上がってきました。「机間指導での到達段階に応じた言葉がけ、認める・次の行動

を促す」「つぶやき、うなずきなどの反応を見逃さない」「わからないということも見ないふりをするのではなくてわからないことにも共感して大事にする」「間違いやハプニングを「おいしい」と思って利用する」「子どもの発言を指導者がまとめすぎない」などです。こうした実践の成果として、不登校傾向にあった児童の欠席日数を調べてみると、幼保小接続に取り組んだ後は欠席日数がぐんと減ったということです。先ほどの言語化した取り組みを大事にしたことで、教師との信頼関係が生まれて、子どもが安心して学校に来られるようになったということが大きなことと思います。

もう一つ良いこととしては、実際に授業や保育を見合って話し合うことで、授業や保育の改善ができるということです。竹田小学校ブロックでは、科学センターに行った幼稚園の子どもたちが、その経験から自分たちのクラスで科学センター（すみれセンター）をつくって、お客さんや友達とのやり取りを楽しむ公開保育を見ました。「いらっしゃいませ。チケットを持っている人はこちらです」「今からクイズが始まります」と、5歳児の子どもたちは自分たちで考えてどんどん活動を進めていました。この活動を見て幼保小の先生方はたくさんの気付きがありました。幼保の先生は、「楽しかったという実体験が、やってみたい、見てほしいという気持ちに膨らんでいく、心が動く実体験というのを幼児期に体験していくことが大切ですね」、小学校の先生は、「5歳児の子どもたちが自分の言葉で案内したり説明したりしていた。学校では言葉を決めたりセリフを覚えたりしているがその場に応じて臨機応変に話せた方が1年生の学びになるのではないかな」等の意見がありました。生活科の単元の中で、お店屋さんごっこのような活動を取り入れることがあります。その時にいつも小学校1年生に、こういう時は「いらっしゃいませ」「どれがよろしいですか」と言いましょとセリフを考えてそれを全部覚えさせることが多かったのです。しかし、5歳児でもこれだけ自分で考えて話せると言うことは、1年生にセリフを考えさせて暗記させなくても、自

分でその場で「いらっしゃいませ。どちらにしますか」というように社会生活に応じた相手意識を持った言葉が使えるのではないかな、売る時の言葉を練習させるということはいらないかもしれない、その方がねらいに沿った意図ある活動ができるかもしれないと考え、生活科の授業を改善していきました。実際に5歳児が活動している保育を見たからこそ、この授業の改善につながったという例です。その結果、自分たちで考えたことをその場で生き生きと話し、すごく楽しい活動・授業になったということです。幼保小接続をすると、子どもが、ワクワクする、生き生きする学びになり、授業改善、保育の質の向上ができ、子どもや教師が変わっていくということにつながっていきます。

#### **4. 幼児期の遊びの中の学びを小学校の学びにつなぐ**

幼児期の遊びの中の学びを小学校の学びにつなぐために、具体的にどのようなことをしていけばよいのか、話をしていきます。

##### **(1) 幼児教育の基本：環境を通して行う教育**

幼稚園教育要領総則（保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領にも同じ内容が記載）に「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、〇〇を通して行うものであることを基本とする。」と書かれています。〇〇には何という言葉が入るでしょう。幼稚園教育要領にあまり触れていない方は「遊び」という言葉がでてくと思いますが、遊びについては「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心にしてねらいが総合的に達成されるようにすること」と書かれています。先の〇〇に入る言葉は、環境です。環境を通して行う教育というのが幼児教育の鉄則、先生が教え諭してやるという教育ではなく子どもが自らムクッと心が動いてやりたくなる環境を作る、環境を通して行う教育であるという基本が示されています。ここは、小

学校の授業と根本的に異なります。学習指導要領には環境を通して行う教育とは、書かれていないと思います。小学校の先生には、考えていただきたいのですが、小学校以上でも子どもたちの心が動く環境というのは作れるのではないかと思います。実際に子どもたちの動いている保育を見ていただくことで、保育の様子を見てもらい保育者がどんな指導を行っているのかというのを見て考えていただきたいと思います。

## (2) 保育について話してみよう

ここで動画を見ていただきます。広島のかえで幼稚園での保育で、子どもたちが「長縄跳び」をする映像です。遊びを通した総合的指導や環境を通して行う教育がどういうものか、そこで子どもたちのどういう学びや育ちがあるのかを感じていただけたらと思っています。動画を途中でいったん止めますので、その場で、もしあなたがその場面にいる先生だったらどういう言葉をかけるかということも考えていただきたいと思います。

### 【動画再生】

#### 「新記録と涙」概要（「主体的な遊びで育つ子ども」エイデル研究所 2020 年より）

長縄跳びが大好きな年長児のゆりちゃんは、1702 回という新記録を打ち立てます。そして、先生からはメダルをもらいます。ゆりちゃんの新記録の誕生でクラスでは、長縄跳びが大人気。しかし、同じクラスのあやなちゃんがゆりちゃんの記録に迫ります。部屋に戻る時間になっても跳び続けるあやなちゃん。縄を回す先生と二人の時間。しばらくして部屋に戻っていた同じクラスの子どもたちが応援に出てきます。その応援の中、あやなちゃんがゆりちゃんの記録を破ります。その様子を見て、ひとり部屋に戻るゆりちゃん。ゆりちゃんの様子を見に行った友達は、「ゆり…嫌なん。ゆりが頑張らな、ゆりの記録にはならんよ」と励まします。クラスみんなで集まった時、涙ぐむゆりちゃん。

ゆりちゃんやあやなちゃんがいるクラスで子どもたちが集まったところまで見ていただきました。すごく感情が揺れ動く場面ですが、そこで

先生が今から子どもたちに言葉をかけます。もし会場の皆さんがこの場にいる先生だったらゆりちゃんや他の子どもたちにどんな言葉をかけるのでしょうか。またどんな願いを込めて言葉をかけるかということを少しだけ考えていただけたらと思います。少しだけ時間を取りますので考えてみてください。

実際にこの先生がどんな言葉を子どもたちにかけたのか少し自分の思っていることも念頭に置きながら見ていただけたらと思います。

### 【動画再生】

#### 「新記録と涙」概要（「主体的な遊びで育つ子ども」エイデル研究所 2020 年より）

泣いているゆりちゃんに、先生は「ゆりちゃんの涙は、悔し涙って言うんよ。あれは、すごくいい涙よ。涙が出るほど悔しい気持ちってね、がんばる力になるけえね。一人の力じゃなくみんながいたから頑張れた」と声をかけます。

先生方は、一人一人が自分の記録を伸ばすことに意識が向くようメダルではなく跳んだ回数を記録することに変更しました。

その後、ゆりちゃんをあやなちゃんのところに行き二人で一緒に跳んで 1000 回を越えようと誘い、新たな目的に向かって跳び始めます。

受講者の先生方は、どんな言葉をかけようと思ったのでしょうか。なぜその言葉をかけようと思ったのか、また動画で先生がどんな気持ちであの言葉をかけたと思うか、最後まで見てどんな感想を持ったか、長縄を跳ぶ達成度合いをメダルから記録方式に変えていましたが、それにはどんな意図があったのか、ちょっと考えていただきたいと思います。最後のグループ協議の時にその話もしてください。

#### ●先生はどんな言葉をかけた？

動画を振り返ると、先生は「ゆりちゃんの涙は、悔し涙って言うんよ。あれは、すごくいい涙よ。涙が出るほど悔しい気持ちってね、がんばる力になるけえね。一人の力じゃなくみんながいたから頑張れた」と言葉をかけられていました。この言葉がすごいなと思います。

気持ちをまず肯定して悔しいと思っちゃダメとかではなくて、悔しいってすごくいい涙だよという風に肯定してから、次への挑戦に向けた言葉を、がんばる気持ちになるよという言葉をかける。涙が出るほどの強い感情を覚える、負けるというのはすごくネガティブな感情を引き起こしますが、それを肯定する。それから結果ではなく過程、本気で頑張ったということを称えている。先生の願い、価値観が子どもたちに伝わっていると思います。それが負けたことは悔しいけれどもそれをバネにするという子どもたちの経験になっていると思います。

### ●この園で育まれているもの

この園で育まれているものはあえて言葉にすると、自らの気持ちを立て直し、悔しい気持ちと折り合いをつける力や、友達の頑張りを刺激に、自分も頑張るぞと挑戦する力、友達の気持ちに気づき、その子の立場に立って励ますことのできる力等です。「嫌なん？」と問いかける子がいましたが、友達の気持ちに気づいて追いかけて、その子の立場に立って励ましたり、感情をあえて言葉にしてみたりということは、なかなかできることではないですね。そういう子ども同士の関係が育っていった、この先生は、ゆりちゃんのところに誰かが行っているなということは気づいてはいたが、自分はそこには行かず、子ども同士でこういう話をしているのかなと思いながら見守っていたそうです。このように子どもに育まれているものというのは、それぞれの先生が感じておられて表し方は人それぞれだと思います。しかし、確かなのは先生が願いをもって援助して環境をつくっているからこそ、子どもにこういう力が育まれているということです。意図ある環境、意図ある援助があってこそ思います。

### ●なぜこのような力が育まれるのだろう？

動画に出てきた園では、子どもの気持ちに共感しながらも、子どもが自分の力で立ち直れるように背中を押す先生の援助がありました。何度も援助をしてもらった積み重ねなのか、子どもたち同士で共感して励ます心が息づいていると言えると思います。

みんなで応援して「自分で頑張る、それが大事だと思うよ」と言える子どもがいることがすごいと思います。先生が大切にしていきたい価値が子どもたちに伝わっているということだと思います。

それから、子ども同士で話せるところは子ども同士でというほど良い距離感がありました。

この時間に中に入らないといけないというわけではなくて、時間枠を柔軟に持って、跳び続ける子どもの挑戦を見守り、支えていました。

保育者同士の連携（縄を回し続ける先生もいれば他の子どもたちと室内に入る先生がいる）があるからできることだと思います。

### ●教育的瞬間

子どものために何らかの教育的な働きかけをしなければならぬ瞬間、今、ここにしかない瞬間が子どもたちにとって意味ある経験になるような瞬間というのが「教育的瞬間」だというふうにヴァン＝マネンという人が言っています。

保育者、教師は保育や授業の中での子どもの表情や行為から一瞬の教育的瞬間をとらえて働きかけを行う力が求められると思います。動画の長縄の一場面にも遊びの中の学びというものがあったと思いますが、教育的瞬間を捉える保育者、教師の専門性は本当に繊細なものなので、なかなか気づきにくかったりすると思います。遊びの中の学びは、この「教育的瞬間」を捉える保育者、教師の専門性に支えられています。

### ●幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

遊びの中の学びが、小学校の先生、中学校の先生が見てもわかりづらいというのがずっと問題点としてありました。なかなか遊びの中の学びが見つけきれない、遊んでいるだけと思われがちで、遊びの中の学びの質が捉えられないというのが幼保小接続では難しさとしてありました。そこで、この幼児期の遊びの中の学びの質を捉える共通言語として幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下 10 の姿という）というものが、幼稚園教育要領・保育所保育指針・認定こども園教育保育要領にも学習指導要領にもしっかり示されています。

0歳から18歳を通じて育てたい三つの資質・能力がどういう姿・どういうイメージで育っていくのかというのを示すものが10の姿です。10の姿は、到達すべき目標ではない、全ての幼児に同じように見られるものでもない、個別に取り出されて、「言葉による伝え合い」を指導したいからこうしましょう等トレーニングのようなものでもない、5歳児に突然みられるようなものでもない、積み重ねとしてこちらに向かうように育てていきましょうというための共通言語です。

先ほどの映像の中の子どもたちはただ遊んでいるだけだったか、そこにはどういう学びの芽生えがあったかということを、10の姿を使って探すことができます。例えば、「私もやってみたい」と思った子どもたちは、やりたいことに向かって心と体が動いている「自立心」、「跳ぶのって楽しいな、こんなに跳べて嬉しいな」と感じるのは、体を動かす楽しさを感じる「健康な心と体」、他の子どもたちがゆりちゃんのところに行って「嫌なん？悔しかったら自分が頑張ればええんよ。」と言っている姿は、言葉のやり取りで互いの思いを共有している「言葉による伝え合い」、すごく深い感情的な結びつきだと思いますが、それが言葉に出ています。記録を超えるぞと、回数を数える、1900回とかすごい数を目標にするというのも「数量の感覚」を感じるということになります。最後の新しい目的を生み出した子どもの二人の姿は一緒にできる共通の目的を達成する「協同性」の姿と見るができると思います。

### ●子どもを見るまなざしがつながっていくことが大切

何を幼保小接続でつなげていくのかということと子どもを見るまなざしがつながっていくということが大切だと思います。幼児教育では、すべての子どもは有能な学び手であると捉えています。だから適切な環境を用意して出会えば、自ら進んで環境に関わり相互作用の中で自ら学びを進め深めていく存在と捉えています。このように子どもを見ると、教師の都合とタイミングで教える授業から、小学校でも子どもたちの声を引き出し、生かす授業への転換が必要だと思います。問われ

るのは教師が果たすべき役割です。これは今、動画を見て頂いて分かると思いますが、幼児教育から学ぶ幼児教育の経験を踏まえて小学校の授業を構想していくということで肯定的な子ども観というものを得られるのではないかなと思います。

安心感さえあれば自分たちで何でもできる存在、幼児期にたつぷりと学んできているという子ども観を持つこと、小学校教員の1年生観の転換、ゼロからのスタートじゃないことを踏まえることで、教えてやらせる、白紙のものに色々なものを詰め込むのではなくて、立ち止まって見守る、尋ねて任せるというようにしていく1年生観の転換をしてくべきだと思います。

5歳児と1年生だけの問題ではなくて、低学年から子どもたちに肯定的なまなざしを向けて大切に育てていくと子どもたちが自分で問いをもって探究する力を持っていく。それが高学年の「総合」で花開くので、1年生だけ低学年だけの問題ではありません。幼保小接続の取組を行うことで質の高い学びを支える環境の在り方や関わり方を再確認するチャンスになります。このように幼保小接続に取り組むことで、子どもたちの声を聴き生かす授業へとつなげていきたいというのが幼保小接続の一番の願いかなと思います。

動画でも、先生はすごく教育的瞬間というものを捉えて関わっていらっしやったと思います。そこが本当に保育者の素晴らしい専門性が見られたところだと思います。

### (3) 乾隆幼稚園・乾隆小学校の実践例から

乾隆幼稚園の保育の様子を写真で見ただけ、幼児期の遊びの中の学びを小学校の学びにつなぐことや、環境を通して行う教育がどのようなものかを見ていただきたいと思います。

5歳児と1年生の合同授業・保育でした。授業の目標や保育のねらいは、以下のようになります。

#### 【小学校】

図画工作科の単元「すなやつちとなかよし」

- ・土粘土の特性を感じながら遊んだり自分が作りたいものを作ったりする。

#### 【幼稚園】

- ・粘土の感触を十分に味わい試したり、工夫したりして遊ぶことを楽しむ。
- ・友達や1年生、先生と一緒に関わりながら遊ぶ楽しさを味わう。

としていました。

園でしている遊びと小学校の生活科の単元にはよく似た活動があります。保幼小で話し合っよく似た活動をさがして、交流しようと、それぞれの発達段階でねらいや目標を立て、打ち合わせをしながら合同授業・保育をつくっていかれました。

粘土の環境設定としては、

粘土を積み上げてタワーをつくるかな・・・、足で踏んで遊ぶかな・・・等、子どもがワクワクと活動する姿を予測し、思い描きながら環境を設定しています。子どもが見た瞬間に遊びたくなる、やってみたくなる環境設定だと思います。

壁には、数字や文字を書いた透明のビニールシートを貼り、1年生が算数の授業で習っている1～10までの数字が書いてあります。10だけではなく100や1000などの大きな数字もあったら子どもたちが楽しいかな・・・と壁に粘土を投げて当てて遊ぶことを予想して環境を設定していました。1年生はこの環境を見たときにもう粘土を投げるという姿があり、発散的な活動でしたが、発散から始まって本当に夢中になって粘土をぶつけていました。

机の上で水を混ぜて、ぬるぬるした粘土をつくったりする環境も用意されていました。

しかし、先生たちの想定外のことが起きます。透明ビニールシートは壁の3分の2くらいの高さまで貼ってありましたが、ビニールシートよりも上の壁そのものに投げると粘土が良くつくことに気づいて、ビニールシートよりも上に粘土を投げ始めるといったことが起きました。小学校の先生も幼稚園の先生もどうすべきかストップすべきか一瞬判断を迫られました。幼稚園の先生の判断で、「止めずに今日は楽しみましょう」と投げ続けることを続けました。本授業・保育の中での子どもの活動は、環境を設定した教師の責任と捉えています。また、その活動で、子どもが何を学ばか

を一瞬で考え授業・保育を構成されていました。子どもたちは、壁とビニールシートの粘着力の違いに気づいて夢中で投げるわけです。合同授業・保育後の協議で幼小の先生が語り合う中で、この話題がどのグループからも出ていました。小学校の先生は止めたくなかった、ルールを示すことが大事ではないかと自分の率直な感想を伝えてくださいました。保育をした先生からは、「環境を設定したのは教師の責任だ、それを大人の都合で制限していいだろうか」と瞬時に自問した。この活動ではワクワクということを1年生の目標にされていたのでワクワクを優先すべきと思った」と、この活動を続け、粘土を投げてもよいことにしたと話されました。でも、この壁や天井がこのままでいいわけがないと、自分たちの場所をどうするかと一緒に考えることで、学べることもあると判断をされていました。そこで小学校の先生も想定外のことがあってもそれを生かして子どもたちのワクワクを優先することや、この場所をどうするのかということも子どもの学びの一つになると気づいたということも感想でおっしゃっていました。

これは後日のエピソードを幼稚園の先生が書いてくださった文章です。とても面白かったので読んでみたいと思います。

週明けの中間休み、1年生の担任がクラスの子どもたちと一緒に来て壁をきれいに拭いてくれた。1年生も年長児もとても真剣な表情で見守り、応援した。拭いた後は全員で粘土を拾い集めた。1年生は「硬くなった粘土に水を入れたら元に戻る」という仮説を立てていたもので、カサカサに硬くなった粘土、石のようになった粘土と粉のようになったカラカラの粘土を小さなボウルに入れて渡し「学校で実験してみてね」と話した。

幼稚園の先生は子どもたちの普段のつぶやきや様子からどこに子どもたちが思考力を働かせているのかを捉えています。学びの芽生えを見つけています。それにプラスして学校で実験してみようというふうに言葉を付け足すことで、子どもたちにはそれが実験になる、と粘土にたくさん関わってそれで終わりではなくて、カラカラになっ

た粘土の片づけの中からも子どもたちの学びを繋げていました。

それから、

1年生の女兒が帰りがけ、靴を履き替えながら、「あー良かった」と独り言をつぶやいていた。きっときれいになってほしかったのだろう。投げたのが自分じゃなくても気にしていたのだと思う。感じる心を持ちそれを自分なりに考えている姿が素晴らしいと思った。金曜日のあの時間で、授業・保育が終わったのではなく、週明けの中間休みで1年生の学び、年長児の学びがさらにあったと思った。

と書かれています。ここでも、1年生の女の子が自分が粘土を投げたわけではなくても「あー良かった」と、きれいになった幼稚園の壁を見てつぶやいていたところを幼稚園の先生がしっかり捉えています。遊びの中にある学び、教育的瞬間を捉えています。それをこのように捉える心をもって自分なりに考えている1年生の姿が素晴らしいと表現されています。

その掃除の後にも幼稚園では粘土遊びが続いたそうです。

誰一人としての以外には投げなかった。1年担任の先生が脚立に乗ってくださった必死の姿を見て『きれいにしてくれはった』『せっかく掃除してくれたのに上に投げたらあかん』と子どもながらに感じたのだと思う。子ども自身が感じて、必要なルール・きまりが生まれたのだと感じた。

と書かれていらっしゃる。

これがやはり子どもたちの様子やつぶやきから学びの瞬間をとらえている先生の専門性です。人から「これが必要なルール、決まりだよ」と言われて守るよりも、子ども自身が、「このルールは必要だ、このきまりがあるから園がきれいになる」と必要感を感じることが大切で、そこに学びがあると先生は捉えています。この幼保小接続の語り合いの中ですごく本質的な問いがたくさんあると思いました。先生の都合でルールを押し付けるのか、活動を制限するのか、それとも今の活動でワクワクを優先すべきなのか、その時にそのままでよいのか、ルールというのをどう考えていくのかということも同時に考えている、本質的な

振り返りがたくさんあったと思います。小学校の先生にとっては、幼保の手ごたえのある実践を見ることがいろいろ考えさせられ、自分の授業に返ってくるところだと思います。

## 5. まず、何をすればよいか？

### ●架け橋プログラムの推進に向けて

#### ① 架け橋ミーティングの開催

架け橋ミーティングで、同じ地域で子どもを育てる園・学校としてどんな子どもたちを育てていきたいのかという共通の視点を是非持っていたきたいと思います。

#### ② 担当者同士の顔の見える関係性の構築

担当者同士の顔の見える関係性を作っていきましょう。

#### ③ 互いの年間計画の共有

どこでコラボできるのかということを見つけていただいて、持続可能な取組になるように時間をかけて着実に発展をさせていていただきたいと思います。

### ●できることから始めてみましょう。

まずは交流から始めてみようかなと思われる先生が多いと思います。たくさんの学校・園（所）とつながるのではなく、同じ校区で核となる園とか学校の関係を作っていくということから始めてみてはいかがでしょうか。

#### ① 幼保小で連絡を取って関係を作る

#### ② 交流を持ちかける

互いの年間計画の中で交流ができそうなことを見つける。

#### ③ 打合せミーティングをする

打合せミーティングを是非していただきたいです。例えば、園でやっている遊びと生活科の単元でやっているよく似た活動というのが必ずあると思います。そのよく似た活動を探してその単元に関することで幼児期にどのような経験を普段しているかや、園でどのような環境構成をしてその学びをサポートしているのかということをお互いに伝え合い、それを授業でどう生かせるか、生かせることはないかというのを幼保小が一緒に考えてみる打合せをお勧めしたいなと思いま

す。

④ 指導案を共有する

できれば、指導案を共有して、環境についてアイデアを出し合い、園にある環境や教材を共有してから、交流をする。

⑤ 交流する(実践)

⑥ 振り返り、次の約束も取り付ける

交流して終わりではなく、できればその後、振り返りをして、次回の約束も取り付けるというようなことです。

この中のどれかでもよいのでまずはできることから始めてみてコラボしていただきたいなと思います。

まず核となるところと交流、そして、学び合うことや打ち合わせができる関係性、コミュニティを築いていくということが大切です。そこからいろいろな園や学校を巻き込んでいくという順番が良いと思います。

●竹田小ブロックの事例から

竹田小学校ブロックでも、子どもたちの様子を見た後に、やりたいことが実現できる環境が学びの基本、自分で動ける環境が主体性を育むということを小学校の先生が学んだというところで、10月に「いきものとなかよし」という生活科の単元について保幼小で一緒に合同指導案検討会をして援助や環境構成について話し合うということをしました。そこで最初は、子どもたちは原稿を読んで生き物について説明する予定でしたが、1年生は、自分の言葉で話せるということで生き物を介して自然に説明するということにするなど指導案を変えていきました。保育者から、「幼稚園では円い入れ物で飼育することがありますよ、みんなで見られるので友達同士でつながりやすいですよ」という環境の提案があり、原稿を読まなくてもザリガニなどの生き物を触りながら、生き物について話し、子どもたちが「いきものとなかよし」の単元を楽しむ活動になったということがありました。この例を基にこれからグループで少し話をしていただきたいと思います。架け橋プログラムというのは交流が目的ではなく交流は一つの方法です。目指すのは子どものワクワクを

引き出して幼保小共に主体的・対話的で深い学びや保育、授業の改善につなげることです。そのために幼保小で関係を築いていって是非、様々な分かち合いをしていただければと思っています。

【写真を持ち寄ってグループ討議】

グループ協議お疲れさまでした。どのグループもすごく活発に話をされていたと思っています。先ほどの長縄の動画について話しているグループもたくさんありました。話していただいていた内容を聞くと小学校の先生、幼保の先生、それ以外の立場の方もたくさんの学びや、自分事として様々なことを感じておられるなと思いました。もし自分の授業だったら、子どもの一人一人への声かけに活かせると思えることがきっとあったのではないかなと思います。それを「よかった」だけではなく、なにが子どもの声を引き出したり生かしたりすることになるのかというエッセンスを感じて頂けたら一番うれしいです。

いつもこのような研修をすると、小学校の先生は、本当に時間がない、やらないといけないことがたくさんある中で幼保小接続にも取り組んでいращやるということをひしひしと感じています。でも、幼保小で話し合っているいろいろ幼児期の経験を知り、幼児教育で資質・能力が育ち、小学校の今を迎えているということをつかっていたいて、授業改善や交流をしていくと、子どもの姿が生き生きとしたものになっていきます。幼保小接続をやってよかったなと思われる先生方がいращやると取組を見ていると感じます。

今日は「いきものとなかよし」について写真を持ってきた方も多く、具体的にお話をさせていただいたと思います。具体的な一場面で共通する視点をどのように目指していくのか、話し合いをしていくと良いと思います。もし生き生きとした子どもを目指すなら、授業の一場面でどんな環境や言葉がけがあつたら子どもは生き生きとするのだろうと、その具体的なところに落とし込んでいくことで、幼保小接続で目指す子ども像につながっ

ていくと思います。

生活科というのは幼保小接続のためにできている科目ですので、今日のような話し合いと具体的な指導案改善を一緒にしていくことをやっていただきたいと思います。今日、研修に来ていただいている先生方は意識が高く、幼保小接続に熱意を持たれている方が多いと思います。是非そのような方が近くにいる場合はつかまえて離さない、コミュニケーションを諦めずにノックし続けていただきたいと思います。また、そうでなくても何かしら関係を作っていただきたいと思います。

それから、幼保小は違いがあるからこそ話し合いをする価値があると思います。あんなこと言っていた、こんなこと言っていた、だけではなく、本音を話し合える関係になっていけたら、お互いにここはどうしても大切にしたいとか、この単位ではここは外せない、というところまで話し合える関係になっていくと本当に保育、授業の改善になっていくと思います。ですから、関係づくりというのもとても大事な幼保小接続の基本だと思います。是非本音で話し合える関係に向かうように、まずは関係性を築いていくところから始めていただけたらなと思います。御清聴ありがとうございました。

令和7年度第6回共同機構研修会

令和7年8月1日

於：京都市子育て支援総合センター こどもみらい館